

大阪における祭礼空間の分析

大阪工業大学大学院 学生員 ○石田 圭太
 大阪工業大学 正会員 吉川 眞
 大阪工業大学 正会員 田中 一成

1. はじめに

今日では「不景気のなか華やかなまつりで街を盛り上げ、商売繁盛につなげたい」という理由から、廃止になっていた都市を巡行する渡御祭・神幸祭が地域住民によって復活することも少なくはない。このような都市空間と密接に関わる渡御祭・神幸祭は、現在、地域を活気付ける観光要素として脚光を浴びつつあり、大きな役割を担うものと期待されている。また、わが国では古来の生活文化において祭礼や年中行事、冠婚葬祭などの非日常を表す「ハレ」と、日常的な時間・空間を示す「ケ」の循環とされてきた。しかし、都市化された現代空間では非日常的とされた特別な衣装や食事が日常化したことなどにより、「ハレ」と「ケ」の区別が曖昧となってきた。

2. 研究の目的と方法

本研究では、「ハレ」という言葉の典型でもある「祭礼」のなかでも文化性・歴史性が顕著に表現される渡御祭・神幸祭を対象とする。祭礼が描かれている絵図を抽出することで過去と現在の繋がりを明らかにし、過去から継承されてきた祭礼に関して、現代の都市空間での見え方を把握することで、時代の変化と同様に変容してきた都市空間と祭礼との関係性を見出すことを目的とする。

具体的な方法として、空間分析機能に優れた GIS を用いることにより、広域から狭域の分析・把握へと展開する。広域な分析では、日本全国で開催される地域の典型的な祭礼を対象とし、祭礼の時期や目的から分類を行うことで日本の祭礼の特徴を把握する。狭域な分析では、江戸時代の観光ガイドブックである名所図会を用い、当時の祭礼と神社を網羅的に抽出することで数量把握する。また、祭礼と関係の深い神社の位置情報をポイントデータとして GIS 上に定位し、地形データとオーバーレイすることにより当時の神社と地形との関係性を空間把握する。最後に、現代における都市空間と祭礼の関係性を、景観分析を行うことで明らかにする。

3. 日本の祭礼

広域な分析として地域の三大祭りと七大奇祭を取りあげ、位置情報を付与することで GIS 上に定位した(図-1)。さらに、祭礼の時期と目的から分類することで、日本の典型的な祭礼の特徴を把握した。

その結果、知名度の高い祭礼の多くが都市を巡行する迫力のある渡御祭・神幸祭であることが確認できた。また、分類結果より夏季に多い夏祭りであることが分かった。夏祭りとは、中世から近世にかけて流行した疫病を祓う夏越しの大祓い神事のことである。そのため、現代に継承された夏祭りの多くが中世から近世を起源にもち、なかでも大坂の夏祭りは当時の文化を反映した祭礼として高く評価されてきた。そのため、狭域な対象地を大阪に絞り分析を行うことにした。

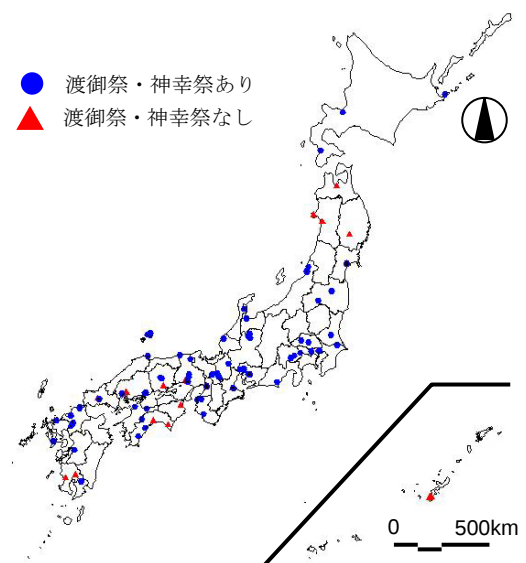


図-1 日本の祭礼

キーワード 祭礼空間, 空間情報技術, 図絵, 変遷, 可視・不可視分析

連絡先 〒535-8585 大阪府大阪市旭区大宮 5 丁目 16 番 1 号 TEL 06-6954-4418

4. 近世の大坂の祭礼

近世の大坂は、早くから開けた土地として、交易の中心地となっていた。そのため、天下の台所として江戸・京に続き三都の一つに称されるとともに、上方文化を確立した。また、現在の大阪は摂津・河内・和泉の旧3か国にまたがっており、著者らの研究室が所有している明治中期二万分一仮製図と輯製二十万分一図を幾何補正し、トレースをすることで当時の大坂の行政界を地図上に定位した。

次に、江戸時代後期の観光ガイドブックである名所図会の復刻版として1980年に出版された日本名所風俗図会を用いて分析を行った。具体的に、図会に記載されている神社と描かれている祭礼を網羅的に抽出することで数量把握を行った。さらに、抽出した神社に位置情報を付与し、土地被覆分類データをオーバーレイすることで空間把握を行った(図-2)。

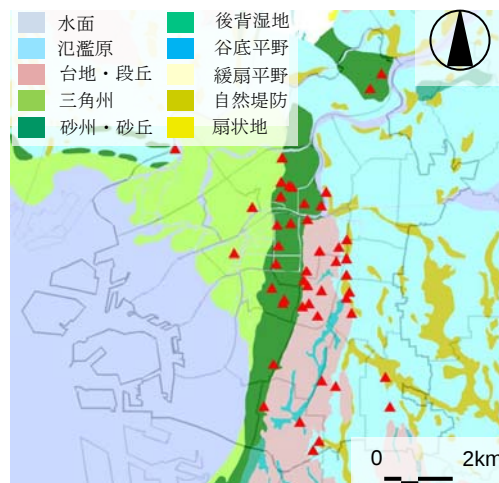


図-2 神社の分布図(江戸期)

5. 現代の大坂の祭礼

狭域な分析では、現在の大坂を代表する夏祭りのなかでも陸渡御と船渡御の2つの異なる渡御祭・神幸祭が執り行われている大阪天満宮の天神祭に着目して景観分析を行った。具体的には、現代の都市空間での見え方を明らかにするため可視・不可視分析を行った(図-3)。分析では、グリッドサイズ1mの数値表層モデル(Digital Surface Model: DSM)を使用した。被観測点を天神祭のメイン神輿である玉神輿の上端に設置し、渡御祭の巡行ルート上5m間隔に配置した。また、神輿の高さを考慮し、陸渡御の場合は高さ4m、船渡御の場合は高さ2.6mに設置して、可視頻度値を算出することで、視覚的な影響範囲を把握した。この結果より、陸渡御は船渡御に比べ視点場が限定されることを明らかにした。さらに、高層ビルなどの建物群は阻害要因になる一方、祭礼時の貴重な視点場に成り得る可能性を見出した。

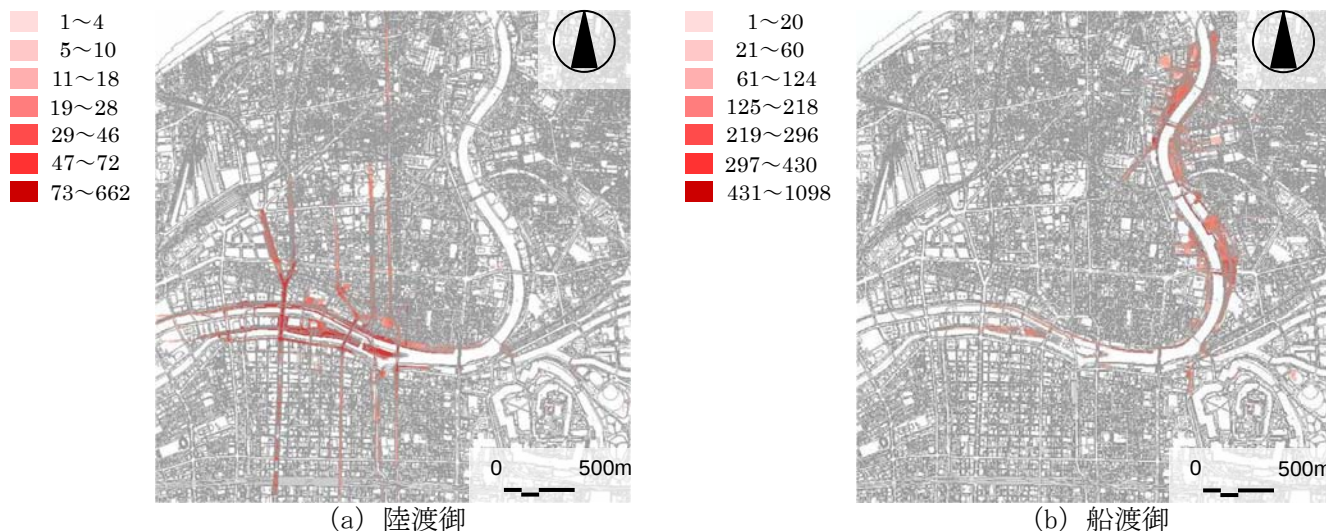


図-3 可視頻度の算出結果

6. おわりに

本研究では、広域な分析により日本の典型的な祭礼の特徴の把握や江戸時代から継承されてきた大坂の祭礼を抽出することができた。狭域な分析では、天神祭における玉神輿の可視領域を把握することができた。

今後の課題として、日常的な時間・空間を示す「ケ」の時系列的な変化を捉え、「ハレ」と「ケ」の比較を行うなど、両面からアプローチを行う必要がある。また、絵図や浮世絵など過去の史料を参考に3次元都市モデルの構築を行い、現在の都市空間との景観対比を行うなど、GISとCADを統合的・融合的に活用した3次元分析、さらには3次元CGモデルを用いての景観シミュレーションへと展開していく必要がある。